

## 紹介

### 『新潟県史』資料編中世

一・二・三

新潟県の中世史料については、既に戦前に高橋義彦氏の編になる『越佐史料』全六巻があり、当時の地方史誌としては稀に見る水準の高さによって、多くの研究者に利用されて来た事は改めて言うまでもなからう。しかしながら戦後になって『奥山庄史料集』・『色部史料集』などいくつかの個別の史料集が刊行され、また市町村レベルでの自治体史の刊行も行なわれつつある今日、そうした成果を踏まえた上での総合的な史料の調査および刊行の事業として、『新潟県史』に寄せられた期待はまことに大きなものがあつたと言えよう。このほどようやくその刊行を終えた中世資料編全三巻は、正しくそうした期待に応え得る充実した内容を持つものであり、七年に及ぶ関係者の方々の御努力に敬意を表し、ここにその内容の大纲を紹介する事にしたい。

まず第一巻には米沢上杉家の所蔵文書を

収めるが、この米沢上杉家所蔵の文書については言うまでもなく既に『大日本古文書家わけ第十二 上杉家文書』全三巻が刊行されている。しかしながら今回の刊行にあたっては、『大日本古文書』では年代順に排列されていたものを全て現状により排列し、文書の現状を詳細に注記した上、筆跡・原型等についての知見を記し、人名・地名等については通常の傍注の外、番号を付して別に典拠史料・関連史料を示すなど細やかな心配りが見られる。また巻末には上杉家文書の現状や伝来についての詳細な解説と、『大日本古文書』の番号および『越佐史料』の巻数・頁数をも併記した編年目録を付し、更に付録として一部文書の写真および花押・印章一覧を別冊に収録するなど、文書集としては正しく到れり尽せりの感がある。これはまた全三巻を貫く基本方針でもあり、第二巻・第三巻ともに詳細な注と解説および付録によって、利用者に裨益する所はまことに大きなものがあろう。

以下、第二巻には色部氏関係の文書や三浦和田一族の文書などを含む『越後文書宝翰集』およびその関連文書と県内所在文書のうち上越地方および阿賀野川以北の下越

地方の文書を収め、また第三巻には金石文を含む県内所在史料のうち中越地方のものと第二巻所収分を除く下越地方および佐渡全域のもの、そして県外所在文書を収めている。これらのうち、『越後文書宝翰集』は既に『奥山庄史料集』・『色部史料集』などいくつかの単行の史料集によってその全てが活字化されており、また他にも『越佐史料』等において活字化されているものも少なくないが、それらも今回改めて詳細な注を付し、未刊史料と合わせて一括して刊行された意義はまことに大きく、殊に解説においてこれらの文書の伝来が総合的に考察を加えられた事は、今後の研究に少なからず寄与するものと思われる。

なお、第三巻の解説には、史料調査の経過と、編纂の過程における史料の省略・選択・割愛について詳細に述べられている。限られた条件の下に行なわれる事業であつてみれば、刊行にあつたの量的な制約はやむを得ぬ事でもあり、その点こうして未収史料について言及しておく事は利用者への指針として是非とも必要なことと思われる。ここに述べられた史料調査の経過に伺える関係者の方々の御苦労に敬意を表しつ

つ、最後に未収史料が一日も早く何らかの形で活字化される事を、殊に今回原本優先の方針から収録を断念された『歴代古案』等の編纂物の活字化を切望しておきたい。

(A5版 第一巻七六三頁 目錄三三頁  
別冊付録二一九頁 一九八二年三月四  
八五〇円、第二巻八〇一頁 目錄四三頁  
別冊付録一五九頁 一九八三年三月四  
九五〇円、第三巻九八二頁 目錄六一頁  
別冊付録三七頁 一九八四年三月 五一  
〇〇円、新潟県)

(今岡典和 京都大学研修員)

## 高槻市文化財調査報告書 第一四冊

### 『摂津高槻城——本丸跡発掘 調査報告書——』

近年歴史時代の遺跡の発掘が、開発による破壊と裏腹の関係ではあるがとみに盛んとなり、睽目すべき成果を挙げつつあることは周知の通りである。本書はその中でも近世初頭を中心とする特に新しい時代の発掘の成果であり、近世考古学の先駆的業績として注目すべきものと言えよう。一九七五～七六年の発掘当時には石垣の基礎に整然とした松材の木組が発見されたことで話

題となったが、その本格的な報告書が高槻城に関する総合的な研究として刊行され、学界の共有財産となったことは誠に喜ばしい。近世はおろか中世の遺構ですら何の調査もされないまま破壊されることのお多い今日、ここまで事を運ばれた関係者の見識にまず敬意を表したい。なお、本書は調査を担当された一人の、高槻市教委技術吏員森田克行氏によって作成されている。以下本書の内容紹介を試みたい。

第一章「高槻城の位置と概要」では、高槻城の歴史とそれぞれの時期の遺構の概略が示され、高山右近時代の「総郭型」から「郭内専士型」へ移行し、広大な城地を持つに至ったことが述べられている。

第二章「調査経過」は、近代以降の城址の変貌と今回の調査の経過の記録。

第三章「遺構」では、典型的な沖積低地であり、「石垣による城壁構築には不向きな地盤」に築かれた石垣の全貌が明らかにされる。多量の栗石と加工木材を組合せた「梯子胴木組」を骨格として造られた人工基盤、松葉敷による足場確保など誠に興味深い。その他、船寄など廃城時の遺構についても触れられている。

第四章「遺物」では、第三章で述べられた「梯子胴木組」の木材をはじめとする「石垣構築にかかわる資材」を中心に、「建物にかかわる資材」など壁土に至るまでの遺物についてまとめられており、木材は勿論、石垣や根固め石の一つ一つについても、法量・岩質・刻印等のデータを一覧表にするという詳細な報告になっている。屋瓦の分類も詳しい。

第五章「考察」では、以上の遺構・遺物について、石垣構築の技法を中心に、化学的な分析なども交えながら考察が行なわれている。前述の「梯子型胴木組」は栗石で掘方の底面が埋めつくされてはじめて機能し、またこの工法はやはり地盤が脆弱な故であり低湿地に築城せんがための施工法であるとされる。また、木材の大きさからその組織的な供給を想定し、穿たれた方形孔から陸送の方法に言及するなど、こうした遺構・遺物が当時の社会の様々な側面に迫りうる材料であることを示唆している。

「組合せ用具」による張糸を使った石垣技法の説明も興味深い。石材についても、規模、形状、矢穴の分析など、特に石垣造りの基本的な技術に関するデータが豊富で、